

筑波大学アーカイブズだより

第4号

2020年11月30日 筑波大学アーカイブズ編集・発行

本学最古？の法人文書、国の重要文化財級か

館長 中野 目 徹

昨年度、総務部人事課からの移管を受入れ公開された法人文書（合計252冊）は、基本的に教職員の進退に関する簿冊群です。背表紙には東京教育大学庶務課による永久保存のラベルが貼られ、いずれも黒色の板目表紙に綴紐という形態で、劣化の様子から見て、おそらく教育大の閉学が迫ったある時期に、まとめて編綴されて筑波大学に移管されたものだと思います。

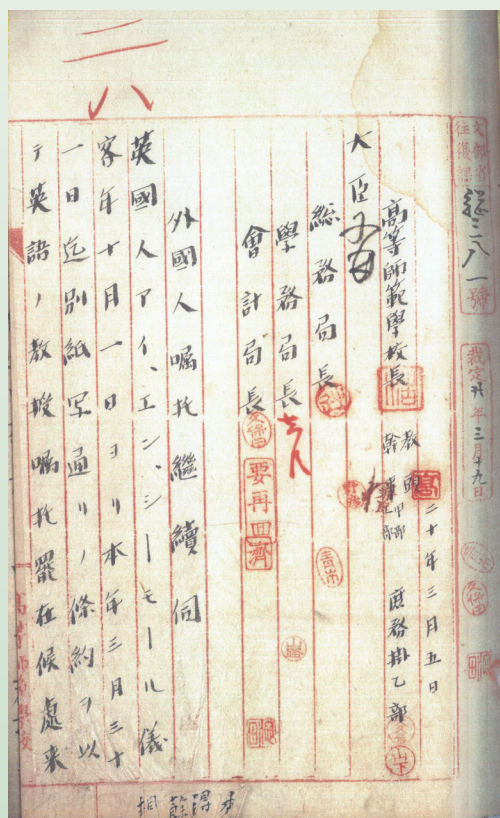
私は以前、筑波移転時に在職されていた古い事務職員で、すでにご退職なさった方から、確かに体芸棟に移したけれども、その後廃棄されてしまったのではないかと聞いていたので、今回、人事課からアーカイブズに移管していただけると聞いたとき、たいへん驚きましたし、うれしく思いました。

例えば、第1冊目の簿冊を開いてみると、最初に綴じられているのは、明治17年（1884）2月21日起案の東京職工学校長に対する人事照会案の東京師範学校校長高峰秀夫による決裁書です。さらにめくっていくと、文部卿大木喬任名の指令書、教職員の辞職願の原本などが月日順に編綴されているのを見ることができます。3冊目の簿冊は、すでに内閣制度が創始され、師範学校令により高等師範学校と改称された後になりますが、巻首

には件名目次が付され、なかには初代文部大臣森有礼の決裁を仰いでいる原議書も散見されます。写真のように、森は名前の一部「有」の字を花押に使用していました。大臣決裁になっているのは、高等師範学校が文部省直轄学校になっていたからです。卒業論文で「森有礼の思想—国家構想における国体観と文明観—」を書いた私にとっては、本学に130年前の森の痕跡があったのかと、感無量です。

現在、東京大学文書館で保存・公開されている「文部省往復」は、当時の東京大学と文部省との往復文書ですが、これらはまとめて国の重要文化財に指定されています。実は文部省の公文書は、大正12年（1923）の関東大震災で焼失していて、それ以前の原文書というのは存在しないのです。したがって、今回移管されて、アーカイブズで保存・公開されることになった人事課文書は、国の重要文化財に指定されてもおかしくない資料だと断言できます。来年の当館『年報』第4号で、簿冊群の構造や内容について詳報する予定です。

最後にひとつ、第1冊目の小口に「進退書類 十七」と墨書されているので、それ以前のもの、すなわち「一～十六」の簿冊も存在していたのではないかと推測されます。もし学内のどこかでこれが見つかれば、大発見、です。



新型コロナウイルス感染症の流行とアーカイブズ

筑波大学アーカイブズ主任 河野 眞純

この一年で最大の出来事と言えば、やはり新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行し、多くの方々が命を落としたことでしょう。2019年12月に中国・武漢で発見された新型コロナウイルスは、翌2020年1月中旬には日本国内でも初の感染例が見られました。その後、4月11日をピークに3月から5月にかけての第一波の流行を経て感染者数が一旦落ち着いたものの、6月下旬からは第二波が到来し、それが終息するどころか、現在では第三波に突入してしまいました。

この間、第一波の際に政府による緊急事態宣言がなされ、学校の休校措置や職場での交代制勤務やリモートワーク等が実施されました。当館においても、4月14日から6月18日まで職員の交代制勤務（在宅勤務）を実施するとともに、4月15日から閲覧室を臨時閉鎖することになりました。

外部からのレファレンス等には引き続き対応していましたが、何とか6月19日から学内者に限って閲覧室の利用を再開することができ、閲覧を希望する学生達が来館しています。

特に、昨年度に移管・公開を行った「人文学類卒論」については、6月から10月にかけて、延べにして32人が、130件の卒論を閲覧しました。

「人文学類卒論」は、昨年度までは人文学類が学類内で管理し学生に閲覧させていたのですが、校舎の耐震改修工事に伴い、当館に移管されたものです。今回の新型コロナ騒動さえなければ、もっと早い時期から閲覧できたはずでした。閲覧者は人文学類の4年生がほとんどですが、中には新生入生も含まれています。その新生入生に話を聞いたところ、今年度は前期の授業がすべてリモート方式の上、教員への相談もメールでのやり取りとなっているため、コースを選択するにあたっての十分な相談ができないので、先輩たちの卒論を参考にしようと考えたそうです。

また、全学的な在宅勤務の導入に

よって、各部局における業務にも影響を及ぼしたことから、当館へ移管予定であった法人文書の受入れが今年の夏までずれ込む結果となりました。

在宅勤務は当館内での業務遂行にも多大な影響がありました。当館の事務職員は2名ですので1日交代の在宅勤務となり、業務連絡はメールで何とかやり取りすることはできました。しかしながら、主たる業務は移管目録の作成を始め現物の法人文書等を相手にする業務ですので、目の前に法人文書等がないと仕事になりません。むろんそれらを自宅に持ち帰るなど不可能ですので、業務の進捗がかなり遅れることとなりました。

他方、予算面においても、当館は例年に比べて非常に苦しい状況に置かれています。新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策のために、全学的に予算が集中投入されたことから、例年配分されていた追加予算がなくなっただけでなく、当初配分も一部留保されてしまいました。

また、先に触れた人文学類の例に限らず、校舎の耐震改修工事が東日本大震災以降、全学的に順次遂行されているため、旧教育学系や旧地域研究研究科等で保管していた開学以来の法人文書も受け入れていますが、予算面の制約から、肝心の書庫の整備が進んでいないため整理ができない状態にあります。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に振り回された1年となりそうです。

今のところ私の周囲では感染者は出ていませんが、有効なワクチンが開発されるなどして、新型コロナウイルス感染症の流行が一日も早く終息することを祈ってやみません。



学生の閲覧した「人文学類卒論」の一部

所蔵資料の紹介

筑波大学における日本史実習の歴史

筑波大学アーカイブズ助教 田中友香理

今年のコロナウィルスの流行は、大学における教育の在り方を大きく変えた。とくにオンライン講義は導入前から現在にいたるまで賛否両論、悲喜交々といった状況にあり、その教育効果を正確に把握するにはおそらく多くの時間がかかるであろう。筆者が在籍する筑波大学人文・文化学群人文文学類史学専攻日本史学コースでも科目の一部をオンラインやオンデマンド形式にすることで何とか例年通りの科目編成で講義を行なうことができた。しかし日本史実習という専門科目については、開催方式の大幅な変更を余儀なくされた。

日本史実習とは、年に一度、教員が院生・学生を引率し、2泊3日程度で日本国内の史跡や資料館等を訪れるものである。2006年に第一学群人文文学類に入学した筆者もまた学生～大学院生時代には毎年参加した。

調べてみるとこの科目の歴史は予想以上に古い。本稿では、当館所蔵の日本史実習に関する史料をいくつか紹介することで、筑波大学、東京文理科大学、東京高等師範学校における日本史実習の歴史を明らかにしたい。当館の主要な業務のひとつは筑波大学の教育・研究に関する史料の収集・保存であるため、当館所蔵史料によって過去の授業の実態に迫ることができるのである。

日本史実習の淵源となったのは、1892年(明治25)、三宅米吉(以下、先生方への敬称は略させていただきます)によって導入された関西調査旅行であるという。その後、1929年(昭和4)に開設された東京文理科大学国史学講座では翌々年から研究旅行が行なわれた。第1回研究旅行は、松本彦次郎と中山久四郎が引率し、3月27日から4月8日までの間に名古屋(真福寺・宝生院等)、奈良(東大寺図書館・室生寺・長谷寺等)、京都(京都帝国大学・修学院離宮・京都恩賜博物館、内藤湖南邸等)、和歌山(高野山親王院等)、徳島(阿波国文庫)等をめぐったものであった(『東京文理科大学閉学記念誌』、1955年、東京文理科大学、174頁)。

この第1回研究旅行を企画したのは当時助手であった木代修一で、「史料そのものをよく見よう」という明瞭な目的を有するものであったという(『松本彦次郎先生をしのぶ会の記録』、1974年、松本彦次郎先生を偲ぶ会、16頁)。当館所蔵の木代修一関係文書のうち日記「過眼抄Ⅰ—昭和6・3」(2020寄木1-1)と「過眼抄Ⅱ昭和6・3—5」(2020寄木1-2)には、研究旅行で訪問した寺院や図書館で調査した史料の名称と内容が詳細に記録されている(木代修一関係文書の伝来と内容については中野目徹「ある文化史家の戦前」・拙稿「木代修一関係文書の書簡史料」、『筑波大学アーカイブズ年報』第3号、2020年)。たとえば京都瓶原の内藤

湖南邸(3月30日訪問)では「蒙文元朝秘史」や「宋版毛詩正義」「古鈔本性靈集」等を調査し、京都大学図書館では「青木昆陽稿本」や「伊勢物語」「平家物語」等を閲覧し、宝生院や高野山親王院では史料の書写も行なっており、当初の「史料」をよく見るという目的が存分になえられたことがうかがえる。木代はこのときのことに、「先生〔松本彦次郎〕は夜一時をすぎても、たんねんにノートしていられるのが印象に残った」と回顧している(上記『松本彦次郎先生をしのぶ会の記録』16頁)。つまり研究旅行とは、史料との向き合い方について、学生が教員から学ぶだけでなく、助手が教授から学ぶ場でもあったのだ。

関西地域を巡検する研究旅行は戦時・戦後一時中止されたが、1949年(昭和24)に復活した。1952年(昭和27)には東京教育大学で第1回研究旅行が実施され、1957年(昭和32)以降、日本文化史実習が正式な専門講義として登録された(翌年から日本社会経済史実習も追加された。『東京教育大学文学部記念誌』(1977年、東京教育大学文学部、146頁))。すでに教授であった木代は第1回研究旅行だけでなく、1959年(昭和34)10月の日本文化史実習を和歌森太郎とともに引率した。日記「過眼日抄X X昭和34・9—11」(2020寄木1-50)によれば、28日付で「けふも、一行は、和歌森、竹田両君にまかせて、自由行動」と記されているが、29日付で「けふから一行の指導をはじめ」として、平等院鳳凰堂等の「説明」をしたとあり、30日の条には「大徳寺はいつものほくのプラン」ともあり、その間、学生と「いろいろ話」したり、碑文や文書史料を書写したりしている。木代は、日本文化史実習を教育と調査研究を兼ねたものと捉えていたようである。

それでは学生たちは実習で主体的に何に取り組んだのであろうか。当館所蔵の渡邊一郎関係文書のうち「近世地方演習アルバム」(2019寄渡2-54)を見るとその一端がうかがえる。1960年(昭和35)3月に実施された「近世地方演習旅行」は、引率教官が津田秀夫で、これに助手の渡邊が同行した。写真1のように、学生たちは津田とともに史料を書写している。写真2は、2016年(平成28)実施の日本史実習(中野目徹引率)の一コマで、新潟県燕市の長善館史料館において、教員の指導のもとOBと院生・学生が史料整理を行なっている場面である。私自身もここに参加し、史料整理の実際と活字化されていない生の史料の魅力を学んだ。60年前の教官と学生たちの横顔を見て、そのとき感じた緊張感と高揚感の双方が蘇ってきた。来年度こそは100年以上の歴史をもつ実習が十全な形で復活できることを心から祈っている。



写真1



写真2

業務日誌（抄） 2019年11月～2020年10月

2019

- 11.18 内田玲央氏より松永聴剣関係の資料の寄贈を受ける。
- 11.20 第13回運営委員会を開催。
- 11.30 「筑波大学アーカイブズだより第3号」を発行。
- 12.10 東京キャンパス事務部学校支援課から資料を受け入れる。
- 12.27 嶋田俊恒氏より嶋田俊平関係の資料の追加の寄贈を受ける。

2020

- 1.21 人文学類から人文学類卒論を受け入れる。
- 1.22 茗溪会東京本部から資料を搬入する。
- 2.21 総務部人事課から資料を受け入れる。
- 3.6 第14回運営委員会を開催。
- 3.27 企画評価室、総務部総務課、総務部組織・職員課、財務部財務企画課、財務部財務制度企画課、施設部施設企画課、施設部施設マネジメント課、学生部学

生生活課、学生部学生交流課、研究推進部研究企画課、学術情報部アカデミックサポート課、医学医療エリア支援室、社会人大学院等支援室、グローバル・コモンズ機構から資料を受け入れる。

- 4.15 新型コロナウイルス感染拡大防止のため閲覧室を当分の間臨時閉鎖。
- 5.31 「筑波大学アーカイブズ年報第3号」を発行。
- 6.12 第15回運営委員会を開催。
- 6.19 閲覧室臨時閉鎖の一部解除。
- 7.14 人間系教育学域から資料を搬入する。
- 7.31 総務部リスク・安全管理課、学術情報部情報企画課、東京キャンパス事務部学校支援課から資料を受け入れる。
- 8.4 人文社会科学研究科国際地域研究専攻から資料を搬入する。
- 9.29 体育芸術エリア支援室から資料を受け入れる。

資料の受入れ 2019年11月～2020年10月

■特定歴史公文書等：移管資料

東京キャンパス事務部学校支援課、人文学類、総務部人事課、企画評価室、総務部総務課、総務部組織・職員課、財務部財務企画課、財務部財務制度企画課、施設部施設企画課、施設部施設マネジメント課、学生部学生生活課、学生部学生交流課、研究推進部研究企画課、学術情報部アカデミックサポート課、医学医療エリア支援室、社会人大学院等支援室、グローバル・コモンズ機構

■特定歴史公文書等：寄贈資料

内田玲央様、嶋田俊恒様

■参考資料

学内

広報室、生存ダイナミクス研究センター、プラズマ研究センター、研究基盤総合センター工作部門、附属図書館、附属小学校、利益相反・輸出管理マネ

ジメント室

学外

国立国会図書館、福井県文書館、公益財団法人渋沢栄一記念財団、和歌山県立文書館、三重県総合博物館、京都大学文書館、常陸大宮市文書館、沖縄県文化振興会公文書管理課、富山県公文書館、札幌市公文書館、東海大学学園史資料センター、慶應義塾福澤研究センター、愛知県公文書館、日本大学企画広報部広報課、法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ、岡山県立記録資料館、東京大学文書館、千葉県文書館、広島県立文書館、東北大学学術資源研究公開センター史料館、国立公文書館、広島大学文書館、内閣府大臣官房公文書管理課、新潟県歴史資料保存活用連絡協議会、明治大学史資料センター、大阪大学アーカイブズ、宮内庁書陵部、北海道大学大学文書館、

山口県文書館、一橋大学創立150周年史準備室、防衛省防衛研究所、青山学院資料センター、外務省外交史料館、相模原市立公文書館、藤沢市文書館、茨城地方史研究会、高松市公文書館、新潟県立文書館、福岡共同公文書館、安曇野市文書館、茗溪会、国立国会図書館関西館、関西大学年史編纂室、福島県文化振興財団、神戸大学大学文書史料室、大仙市アーカイブズ、名古屋大学大学文書資料室、沖縄県公文書館、京都府立京都学・歴館、広島市公文書館、早稲田大学大学史資料センター、富山県歴史資料保存利用機関連絡協議会、北海道大学150年史編纂準備室、北原保雄、神奈川県立公文書館、わだつみのこえ記念館、渋沢史料館、高知県立公文書館、東京都公文書館、鹿児島大学、水口政次

筑波大学アーカイブズ

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

電話：029-853-4127（代表）

メール：univ-archives@un.tsukuba.ac.jp

H P：https://archives.tsukuba.ac.jp/

つくば駅からアーカイブズまでのアクセス

【バス】

関東鉄道バス「筑波大学中央行」or「筑波大学循環」に乗車後約10分、「第一エリア前」で下車、その後徒歩約2分

【お車】

駐車場もございますので、お車でございましたことでもできます（数に限りあり）。

